

第1編

第1部 少子社会を考える—子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を—

終章 子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

1 「男女が共に暮らし、子どもを産み育てることに夢を持てる社会」の全体像を見る。

これまで、「子どもを産み育てることに夢を持てる社会」を構成する家族、地域、職場、学校の姿についてそれぞれ展望してきた。

家族については、その形態や構成員相互の関係に変化の動きは見られるが、家族への期待感はむしろ強まってきている。家族は、時代と共に変化しながら、今後とも人々の安らぎの場、子どもを産み育てる場として、基本的な役割を果たしていくものと考えられる。

また、職場については、高度成長期に形成された日本的雇用慣行について、その利点は生かしつつ、見直すことも迫られている。

地域についても、多様な地域活動が拡がり始めるとともに、人口の都市流入に伴い形成されてきた郊外住宅地域の職住分離のあり方について見直しの兆しがある。

さらに、学校についても多様化・流動化の動きが始まっている。

このような動きを活かして、21世紀につくろうと我々が考える「男女が共に暮らし、子どもを産み育てることに夢を持てる社会」とはどんな社会なのか、改めてその全体像をここで見てみたい。

第1編

第1部 少子社会を考えるー子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

終章 子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

2 家族内の個人が自立し、それぞれの生き方を尊重する中で、お互いを支え合えるようになれば、家族は潤いの感じられるものとなり、子育てに喜びを感じることもできるものになるだろう。

家族に対する期待感強いにもかかわらず、少子化は進行している。これは、家庭を持ちたい、子どもを持ちたいという欲求と、過度に家族に縛られることなく個人としての生き方を実現したいという欲求との間で個人が直面しているある種の葛藤の現れではないだろうか。

第2章第6節でも述べたように、個人が家族を得たいという欲求と仕事や学習、地域参加など様々な活動をしたいという個人としての欲求の実現が両立できるためには、家族内の個人が自立し、それぞれの生き方を尊重しつつ、お互いを支え合えるような家族が求められていくであろう。

そして、家庭における男女共同参画が進み、そのような家族が形成される中で、母親のみに子育て負担が集中するような状況が改まれば、家族はその構成する全ての人にとって潤いの感じられるものとなり、男女が共に子育てに責任を果たしつつ、その喜びを感じることもできるものになっていくのではないだろうか。

第1編

第1部 少子社会を考えるー子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

終章 子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

3 職場優先の企業風土の是正と多様な働き方の適切な評価により、男性も女性も家庭や地域での生活と両立する働き方ができるようになるだろう。

情報通信技術の進展により、同じ職場空間で長時間共に過ごすだけでなく、時間と空間を超えて情報を交換、共有することが可能となり、また、必要となっている。追いつけ型経済の終焉、国際競争の本格化により、業務遂行における自立性、自己完結性が求められるようになり、職場の都合を最優先する意欲、態度よりも、結果としての業績に重点を置いて評価しようとする雇用管理も始まっている。多様な形で、社会経済の変化に合ったより合理的・効率的な仕事の仕方や雇用管理へ転換しながら、少子化をもたらしている一因になっていると指摘される職場優先の企業風土を是正することが求められている。

また、これまでのような日本的雇用慣行に沿った働き方だけではなく、派遣や短時間勤務など多様な働き方が適正な賃金や評価を受けられるようになることが望まれる。女性や高齢者も含め誰もが意欲と能力と生活環境に応じた働き方を選び、また、その変更を柔軟に行うことができるようになれば、職場優先の男性が中心になった同質性の高い職場から、様々な価値観、生活様式を持つ人々が共に働く職場に変わり、個人を尊重する風土が形成されるのではなかろうか。

これらのことによって、男性も女性も家庭や地域での生活と両立する働き方が実現されるのではないだろうか。

第1編

第1部 少子社会を考える—子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を—

終章 子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

4 生活圏にあったまちづくりにより、地域社会に新たな共同性が生まれると、地域による子育て支援力が増し、親たちの子育ての負担が軽減され、子育ての喜びが増していくだろう。

戦後、地域構造が変化し、その中で、従来、地域社会が持っていた共同性（共同体としての意識と支え合い）が、郊外では形成されず、都市中心では失われ始め、農村では若年女性の結婚忌避というかたちで否定され始めている。そして、このように地域から共同性が失われた結果、子育ての負担と責任が家庭とりわけ母親と学校に集中しているのが、子育てをめぐる地域、家庭、学校の今日の状況だといえよう。

職住が近接した生活圏にあったまちづくりが進めば、地域を仕事と暮らしの総合的な場とする人が増え、また、通勤時間が短くなったり、職場優先の企業風土が改まれば、仕事では他の地域に通っていても、地域でいろいろな活動に参加する人も増えるだろう。雇用者、自営業者、高齢者、障害者、外国人、子ども、いろいろな人が地域を「自分の暮らすところ」としてそこに帰属意識を持ち、もっと関わっていけるようになるのではないだろうか。

また、地方分権が進めば、地域はもっと自分たちで変えられるようになる。逆に自分たちで変えなければ、誰も変えてくれなくなる。「地域をよくする」住民の活動が、もっと盛んになることが期待される。

そして、民間非営利団体の活動のように、多様な人たちが多様なやり方で「地域をよくしよう」と主体的に活動を展開する中で、新たな共同性（共同体としての意識と支え合い）が生まれてくるのではないだろうか。それは、個人が共同体に埋没するのではなく、自立した個人が連帯することにより、多様な個人の生き方、家族のあり方を受け入れ、支えていくものになるだろう。その中で、子育てに対する自発的非制度的な様々な支援が活発になり、子育てを相互に支援し合ったり、かつて子育て支援を受けた者が支援する側に回ったりと、地域の子育て支援の輪が広がっていくのではないだろうか。

また、学校の「スリム化」と過度の受験競争の是正によって、子どもたちが時間的・精神的にゆとりを得、このような地域の中でいろいろな人々との関わりを持つようになれば、画一的評価尺度だけで測られることなく、個性を伸ばしながら社会性を身につけていけるようになるのではないだろうか。

これらのことが、公的サービスや企業による保育サービスなどがより多様になり選択できるようになることと相まって、地域による子育て支援力を増し、親たちの子どもを産み育てることの負担を軽減し、子育ての喜びを増していくのではないだろうか。

第1編

第1部 少子社会を考えるー子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

終章 子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

5 職場における新規学卒採用の偏重と年功序列型賃金制度の見直し，学校教育における多様化・流動化の動きによって，就業や就学と子育てが両立する人生をより柔軟に設計できるようになるだろう。

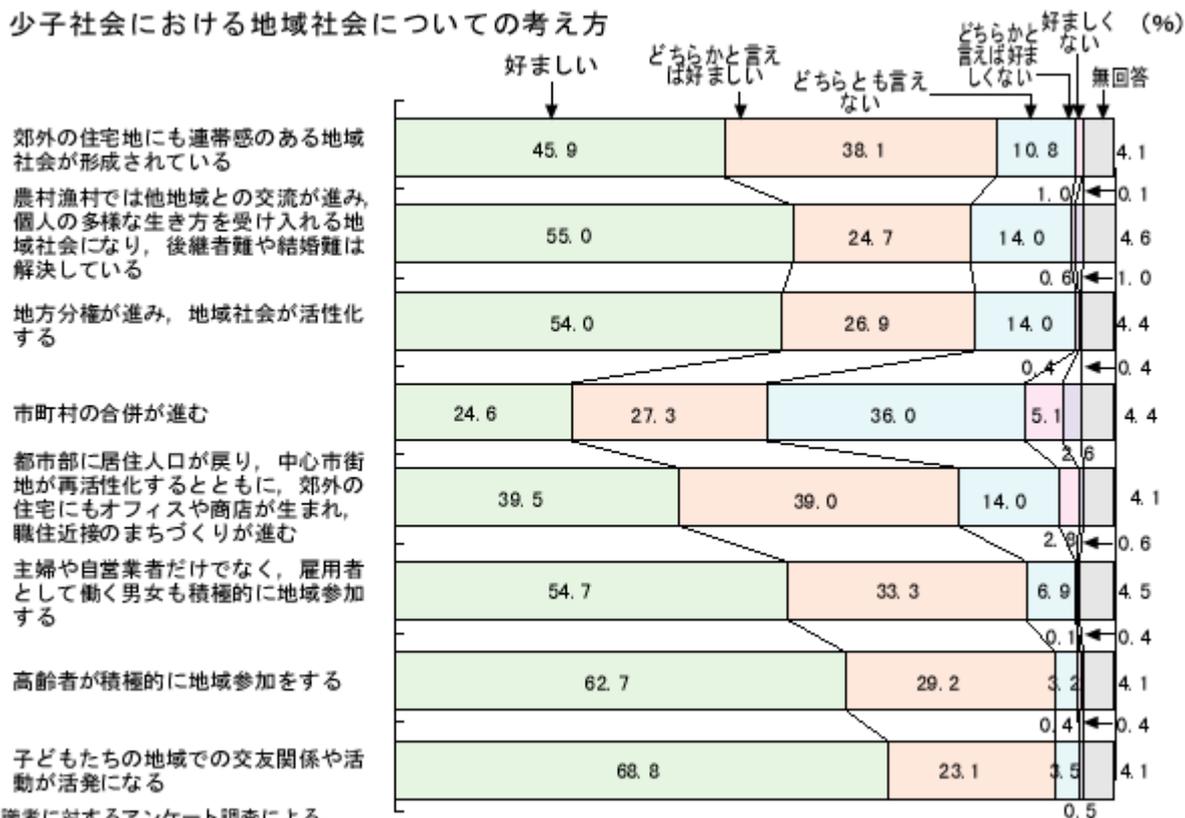
今後は，若年労働力の供給は減少が予想され，また，激しい市場の変化に迅速に対応するには企業内で育成した人材だけでは限界がある。これからは中途採用枠の拡大が求められる。また，労働力の高齢化により，企業にとっての負担が重くなっている年功序列型賃金制度の見直しの必要性も増している。これらの見直しにより，女性や高齢者の就業が容易になるとともに，就業コースの柔軟な変更が可能になるだろう。

学校教育においても画一的・固定的な教育のあり方を見直しが進んでいる。本人の選択を可能とする学校ごとの特色づくりや履修科目の多様化が活発に進み，就学途上でのコース変更や，いったん社会人となった後の再就学など，就学コースの流動化も期待される。

就業コースや就学コースが柔軟に変更できることにより，女性にとっても，現在の「就学，就職，継続就業しながらの子育て」又は「就学，就職，子育てのためにいったん退職，再就職」というコース以外にも，多様な人生設計が可能になる。例えば，子育てをしながら就学する，子育て後に就学してより自分の適性にあった仕事に就くなども容易になるだろう。これによって，男女ともに個人が人生の各段階において意欲と能力と生活環境に応じて職場を選択できる可能性が広がり，子育てによって人生における就業や収入や自己実現の機会が決定的に失われることを防ぎ，子育てと両立する人生をより柔軟に設計できるようになるのではないだろうか。

図5-1 少子社会における地域社会についての考え方

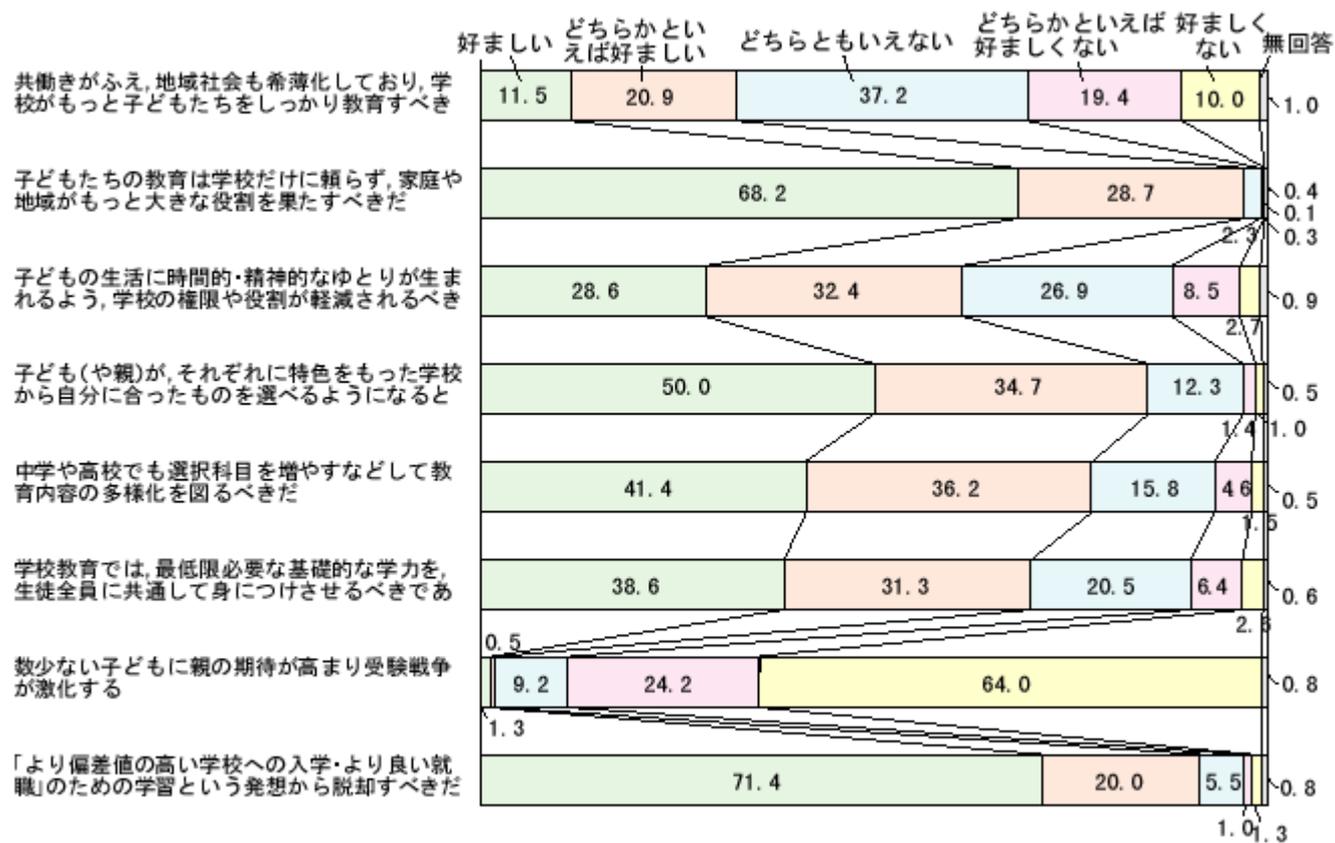
図5-1 少子社会における地域社会についての考え方



(注) 有識者に対するアンケート調査による。
資料：1997(平成9)年度厚生科学研究「少子化社会における家族等のあり方に関する調査研究」

図5-2 今後の子どもたちに対する学校教育のあり方について

図5-2 今後の子どもたちに対する学校教育のあり方について



(注) 有識者に対するアンケート調査による。
資料：1997(平成9)年度厚生科学研究「少子化社会における家族等のあり方に関する調査研究」

第1編

第1部 少子社会を考えるー子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

終章 子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

6 過度の受験競争が是正され，親子関係がより多面的なものとなり，教育に対する親の不安感も軽減されるだろう。

企業における中途採用の拡大，学校教育における多様化・流動化の動きにより，過度の受験競争が是正されると，受験競争でよい成績を修めることが「よい子」であり，子どもをそう育てることが「よい母親」であるかのような，画一的評価尺度から家庭が解放されるようになると期待される。そうすれば，子どもたちも受験勉強だけでなく，家庭の一員として積極的に家庭生活に関わるようになり，また，母親も，子どもの受験勉強に過度に入れ込む責任感，負担感から解放され，家庭における親子の関係がより多面的な厚味のあるものとなっていくのではないだろうか。

親や子どもが子どもの発達段階，興味・関心，能力・適性等に応じて学校や履修科目等を選択できるようになり，また，子どもの能力・適性等に応じたきめ細かな指導が受けられるようになれば，過度の受験競争の中で自信を失い，学校に居場所がないと感じていた子どもたちも，主体性をもって伸び伸びと学べるようになると期待される。そのことによって，自律心が培われ，子どもの「生きる力」が育まれ，子どもの教育に対する親の不安感も軽減されるのではないだろうか。

第1編

第1部 少子社会を考えるー子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

終章 子どもを産み育てることに「夢」を持てる社会を

7 家族, 地域, 職場, 学校がそれぞれ変わっていくことで, 「男女が共に暮らし, 子どもを産み育てることに夢を持てる社会」の形成につながっていくことが期待される。

以上2~6に述べたような方向に, 家族, 地域, 職場, 学校がそれぞれ変わっていけば, 父親の積極的な子育て参画や地域社会による子育て支援が進み, 子どもの過度の受験競争などに関わる親の負担感が緩和されることなどが期待される。

こうしたことにより, 子育ての負担が母親のみに集中する状況が緩和され, 両親が共に子育て責任を果たし, それを基本として, 公的なサービスや地域社会, 企業における支援など様々な支援の中で, 子どもが育まれるようになれば, 子どもの健やかな成長とともに, 両親が共に子育てに喜びを分かち合えるような「男女が共に暮らし, 子どもを産み育てることに夢を持てる社会」の形成につながっていくのではないだろうか。
